

Re:

Your Noise, Your Voice. Re:Play the City.

あなたのノイズが、都市をRe:Playする。

藤嶋咲子 展覧会
Sacco Fujishima Exhibition

Re:Play

2026 3 7 Saturday
▶ 3 21 Saturday 13:00-19:00

CCBT

アーティスト・藤嶋咲子は、2025年度CCBTアーティスト・フェローとしてプロジェクト「コエノクエストー都市に残されたセーブデータ」に取り組み、都市に埋もれた声を手がかりに、これまで交わることのなかった他者と対話するための仕組みを、ゲームというあそびを通じて探してきました。

新作ゲームインストール「Re:Play」を中心とする本展において、ゲームは単なるエンターテインメントではなく、他者の生に触れるための装置として機能します。プレイヤーは、普段街で見かけても聞くことのない「声」に、ゲームのメカニクスを通じて能動的に触れていきます。それは単なるNPC(Non-Player Character)という役割を超えた生々しい実存であり、プレイヤーは彼らとの境界を揺さぶられることとなります。本展は、効率化や多数決の論理に埋もれていく個のノイズを、あえてシステムやテクノロジーによって都市に呼び覚ます、新しいコミュニケーションの実験です。



この都市に生きてると、割り振られた「ロール(属性)」を演じることに追われ、自分自身の声が、どこか他人のノイズのように聞こえることがあります。性別、肩書き、家族での立ち位置、経済的・身体的な境遇—私たちは、背負わされる「ロール(属性)」のもとで、言葉にならない違和感や息苦しさを、ときに抱え込まれてはいないでしょうか。制作を通して、私は「親になる」という不可逆的な変化を迎え、その特権性を引き受けると同時に、求められる社会的役割のなかで生まれる行き場のない感情のただ中にいました。「Re:Play」は、社会的な「正しさ」に埋もれた個人的な声を、あそび(Play)を通して扱う試みです。ふとこぼれ落ちたノイズはデータとして編み直され、都市を巡りながらあなたへと響きはじめます。NPCとPlayerの境界が揺らぐこの場所で、あなたの現実はずいぶん更新(Re:Play)され始めるはずです。

藤嶋咲子

藤嶋咲子 Sacco Fujishima *Re:Play*

会期 > 2026年3月7日(土)~3月21日(土) 13:00~19:00

休館日 > 月曜日 観覧料 > 無料

会場 > シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]

主催 > シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]

- ・作品体験時間は約20~40分です。状況や曜日により、予告なく整理券制等に変更となる場合がございます。
- ・最新情報は展覧会詳細ページをご確認ください。
- ・会期中の鑑賞サポートについては、展覧会詳細ページをご確認ください。
- ・本展は、シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] 「アート・インキュベーション・プログラム」の一環として開催されます。

CIVIC CREATIVE BASE TOKYO
シビック・クリエイティブ・ベース東京

シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前1-14-4

1/1 (ONE) HARAJUKU "K" B1-3F

https://ccbt.rekibun.or.jp/

会場まで坂道があります。車椅子の方など移動に不安のある方は、事前にCCBTまでご連絡ください。

アクセス: 原宿駅竹下口より徒歩2分、

明治神宮前(原宿)駅3番出口より徒歩4分

開館時間: 13:00~19:00 休館日: 月曜日

お問合せ: E-mail ccbt@rekibun.or.jp



展覧会詳細ページ



藤嶋咲子 Sacco Fujishima アーティスト

アート×ゲーム×社会問題を軸に、絵画やインタラクティブな手法を用いて、現代社会との関係性を探る多面的な表現を試みている。代表作「WRONG HERO」では、RPGの構造を通じてジェンダーや社会的役割に潜むステレオタイプを問い直し、鑑賞者を「プレイヤー」として巻き込む批評的体験を構築。仮想空間で声を集め、現実の「出来事」として立ち上げた「バーチャルデモ」では、鑑賞者の主体性ととも、現実と仮想の境界そのものを揺さぶっている。



永松歩 Ayumu Nagamatsu プログラマー、CGアーティスト

Generative ArtやVisual Musicといった様式、自生的コンセプトを参照しながら、映像制作、演出手法の開発、上演支援を行う。プロシージャルな造形手法、グラフィクス・アルゴリズム、データ表現の技術的側面だけでなく審美的側面にも着目し、作家活動や教育にも従事。近年は、アーティストとして半公共空間での常設作品を複数制作している。

写真撮影: 山口伊生人

